

## 博士論文審査結果報告書

学位授与番号 医博甲第 1944 号

学籍番号

氏名 田淵 紀子

論文審査員

主査(職名) 島田 啓子(教授) 印

副査(職名) 荻井 明美(教授) 印

副査(職名) 須釜 淳子(教授) 印

論文題名 Mother's feelings of distress and related factors resulting from the crying of her one-month-old infants (生後1ヶ月児の泣きに対する母親の困難感と関連要因)

## 論文審査結果

## &lt;論文内容の要旨&gt;

本研究は、生後1ヶ月児の泣きに対する母親の困難感の実態を探り、その関連要因を明らかにすることを目的とし、正常児を出産した母親を対象に自己記入式質問紙調査を実施したものである。調査内容は、これまでの研究結果や母親へのインタビューを参考に、泣きに対する母親の困難感項目と困難感の関連要因項目、基礎情報項目が設定された。調査は、研究同意を得た母親654名から回収(回収率85.7%)、有効回答は630名(有効回答率82.6%)であった。分析は、一元配置分散分析、多重比較検定、t検定、相関係数、重回帰分析(ステップワイズ法)などが行なわれた。“泣くと戸惑う”経験のある母親は344名(54.6%)と過半数を超え、“抱いたり、あやしても泣きやまない”経験のある母親も約40%存在していた。困難感に関連していた要因として、相関係数 $r=0.3$ 以上で有意な相関を認めた15要因が明らかにされた。また、母親の生活状況(里帰り、混合栄養、夜間の授乳など)が困難感に関連していることが示された。重回帰分析の結果、「泣きの性質」、「寝入りの状況」、「育児経験」、「育児負担感」、「育児の自信」など9要因で困難感全体の64.0%が説明され、児がなかなか寝つかない、頻繁に泣くなどの児をもつ母親や育児経験の少ない母親ほど困難感を募らせる傾向が示された。

## &lt;審査結果の要旨&gt;

本論文は、研究者が児の泣きに対する母親の情動反応に着目し、長年、縦断的に取り組んできた一連の研究のひとつである。これまで着手されてこなかった生後1ヶ月という時期に着目し、この時期の母親の困難感の実態と関連要因が明らかにされたことは新奇的であり、これまでの先行研究(3ヶ月以降の乳幼児を持つ母親の育児支援研究)につながる有効な資料となりえると考えられる。さらに、本研究成果は、児側の要因と母親側の要因の双方の共通性と独立性に着目し、1ヶ月時の児の泣きの特徴や母親の生活状況を把握することで、母親のストレスを予測し早期の支援介入につながる研究として有用と考える。公開審査では介入研究への示唆や母親の育児に対するpositiveな側面を含めた調査内容の検討など今後に向けた有意義な示唆およびリカート尺度の得点化に対する指摘がなされた。研究者は、質疑に対して適切に回答しており、課題研究の遂行に必要な学識と研究活動を自立して行うことに必要な研究能力を有すると認め、合格基準を満たすものと判定した。

よって、本論文は博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。